

森鷗外『文づかひ』のテキスト生成研究 資料篇

檀原 みずず

『文づかひ』は、森鷗外のドイツ留学記念三部作の掉尾を飾る作品である。この作品は作者が機会あることに改稿を行っているので六種類の異なった本文が存在する。鷗外自筆原稿をはじめ、『新著百種』『美奈和集』『改訂水沫集』『塵泥』『縮刷美奈和集』などの諸本を比べると、それぞれの本文間での異同が多く認められる。その種類は、文・句・用語・助動詞・助詞・送り仮名・漢字・平かな・外国語表記などの変更や、誤植の訂正などと多岐にわたっている。こうした鷗外の推敲過程をたどることによって、作者の改訂の意図を探り、そこから新たな読みの可能性も生まれてこよう。

大阪樟蔭女子大学図書館では、『文づかひ』の森鷗外自筆原稿を所蔵している。この原稿は平成元年三月に「解題」を付けて本学図書館から複製公刊されている。テキスト生成研究においては、オリジナル原稿の特別閲覧の許可を得て調査、確認の作業を行った。原稿における推敲の跡は意外と少なく下書きがあったのではないかとさえ思われる。鷗外の訂正箇所は、墨で消したあと余白に書き入れたものや紙片を貼って上から書き直したものが主である。鷗外自筆原稿からは貼紙の下に書かれた

「草案」もはっきりと読み取ることが出来るので、それらをも異同の対象に加えて、改稿過程の調査を充実させた。

『文づかひ』は、親の強制による結婚を避けるため、宮中に出仕するイ、ダ姫の物語である。姫の脱出に重要な文づかひの役割を果たした青年士官小林が、帰朝後に「それがしの宮」が催す独逸会で体験談を語るという構成になっている。

『文づかひ』が最初に活字で発表されたのは明治二四年一月二八日、『新著百種』第十二号であった。森鷗外自筆原稿は毛筆で半紙二四枚に書かれており、本文の扉の部分に鷗外が森田思軒宛てた批評依頼の書簡と『新著百種』の表紙見本が一枚挟み込まれて、和綴じになっている。鷗外の森田思軒宛書簡には「来二十五日叢刊 即日批評をかぶり度此に今より御依頼申上候二十三日 鷗外 思軒様侍史」とあり、この原稿が明治二四年一月に書かれたことが推定できる。鷗外が、登志子夫人と離婚した直後の執筆と思われ、作中における結婚観などに鷗外の心境が反映されているという見方もできる。

『文づかひ』の作品を読む上でこのテキスト生成過程の研究は、文学

研究と不可分の関係にあると言えるだろう。本稿では『文づかひ』の初出文が掲載された『新著百種』を底本として、出来る限り詳細に鷗外の改訂の跡をたどり、六種類の本文についてそれぞれの異同を示すことにしたい。

凡例

一、『文づかひ』の校異は、鷗外自身が加筆訂正したと認められる次の七種類の本文を取り上げる。「」内は諸本の略称である。

〔案〕 草案

〔原〕 森鷗外自筆原稿

〔底〕 『新著百種』第十二号

〔美〕 『美奈和集』（初版）

〔改〕 『改訂水沫集』（訂正再版）

〔塵〕 『塵泥』（初版）

〔縮〕 『縮刷美奈和集』（初版）

一、『新著百種』を底本とし、「底」と表記する。

一、本文の旧漢字・旧仮名などは出来る限り『新著百種』と同じ字体を尊重し、ルビも『新著百種』と同じように付した。

一、「底」には文頭の一字下げがないため段落がはっきりしていないので、諸本を校合した上で全文を五三節に分けた。

一、各節のはじめに付けたへゝの算用数字は段落番号を、各行末の○の数字は行番号を表す。

一、【】は「底」の引用箇所であり、その下に諸本との間の変更部分をゴシックで示した。

一、森鷗外自筆原稿の中で書き込みや紙片を貼って書き直した箇所を、「草案」として「案」と略記する。

一、「原」で□によって囲った箇所は「案」の上に貼紙して訂正した部分を示す。

一、「案」の判読不能の字は○で空白にした。

一、漢字の俗字や異体字などへの変更は全て挙げている。

一、変体仮名や踊り字の変更も全て挙げている。ただし合字は取り上げなかった。

一、ルビは「原」「底」には多く振られているが、「美」以降の本文ではほとんど省かれている。ルビの異同はいちいち取り上げないが必要な場合のみ示した。

一、句読点の変更は少ないので、変更部分は全て取り上げた。

一、カタカナの固有名詞の傍線（人名）、二重傍線（地名）は「縮」で全て省かれているが、いちいち取り上げなかった。

一、*（アステリスク）は注記を示す。

文づかひ

- 〈1〉それがしの宮の催し玉ひし星が岡茶寮の獨逸會に、洋行がへりの將校次を逐うて身の上話せられし時のとまりしが、こよひはもん身が物語聞くべき筈あり、殿下も待かねておはすれば、と促されて、まだ大尉にありて程もあらじと見ゆる小林といふ少年士官、口に嘸へし巻烟草取りて火鉢の中へ灰振落し、仔細らしく身構して語出でぬ。
- ①
②
③
④

①【催し玉ひし】催したまひし「塵」。【身の上話】身の上はなし「改」る。【灰振落し、】灰振り落して「塵」灰振り落し、「縮」。【仔細ら身の上ばなし】「塵・縮」。【せられし】せさせられし「案」せし「改」しく身構して語出でぬ【仔細らしく身構して語りぬ】「案」仔細らしく「塵・縮」。②【待かねて】待兼ねて「塵」。【おはすれば、と】おはす身構して語り出でぬ「原」語りは始めぬ「塵」徐かに語り出ればと「塵」。④【取りて火鉢の】取りて、火鉢の「原」。④【振落し、】ぬ「縮」。仔細らしく身構して語出でぬ。】*「改」では、この一行が欠落してい

- 〈2〉いがザツクセン軍團につけられて、秋の演習にゆきしをり、ラアゲ井ツツ村の邊にて、術①語に定まりたる敵といふ陣につけられしとあり。小高き丘の上に、まばらに兵を排りて、敵②と定めぬき、地平の波面、木立、田舎家などを巧に楯に取りて、四方より攻寄するさま、めづらしき壯觀ありければ、近郷の民こゝかしに群ををし、中に雜りたる少女等が黒天鵝絨④の胸當晴れがましよう、小皿伏せたるやうある縁狭き笠に艸花挿したるもをかしと、携へし目⑤がね忙はしくかゝたこゝたを見廻らす程に、向ひの岡ある一群きは立てゆかしう覺えぬ。⑥
- ①
②
③
④
⑤
⑥

①【ゆきしをり】ゆきし折「塵」。【ラアゲ井ツツ村】ラアゲ井ツツ村
 「原・改・塵」。【術語に定まりたる敵といふ陣につけられしとあり】
 ③【地平の】地形の「改・塵・縮」。④【壯觀をりければ】壯觀なれば
 對抗は既に果てて假設敵を攻むべき日とはなりぬ「改」對抗は既に果
 【案】。【こゝかしこに】こゝにかしこに「美・改・塵・縮」。⑤【を
 して】をこしく「原」。
 ②【排りて】配りて「塵」。

〈3〉九月はじめの秋の空は、けふしもこゝに稀あるあみ色にありて、空氣透徹りたれば、残る限
 なくあざやかに見ゆるこの群の真中に、馬車一輛停めさせて、年若き貴婦人いくたりか乗り
 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨
 たればさまざまの衣の色相映じて、花一叢、にしき一團、目もあやに、立ちたる人の腰帶、
 坐りたる人の帽の紐などを、風ひらくくと吹靡かせたり。その傍に馬立てたる白髪の翁ハ角
 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨
 扣釦どめよせし緑の獵人服に、うすき褌いろの帽を戴けるのみあれど、何となく由ありげに
 見ゆ。すこし引下がりにて白き駒控へたる少女、わが目がねハしこれに留まりぬ。鋼鐵い
 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨
 ろの馬のり衣裾長に、着て、白き薄ぎぬ巻きたる黒帽子を被りし身の構げだかく、今かあたの
 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨
 森蔭より、むらくと打出でたる獵兵のいさましき見むとて、人々騒げどかへりみぬさま心
 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨
 憎し。

②【乗りたればさまざまの】乗りたれば、さまざまの「原・塵」。④【坐
 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨
 りたる】座りたる「塵」。【ひらくと】ひらひらと「塵」。【吹靡か
 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨
 せたり】吹靡かしたり「改・塵・縮」。【翁ハ角扣釦どめよ】翁と、
 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨
 角扣釦どめよ「原」翁は角扣釦どめに「美・改・塵」翁は角扣釦どめ
 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨
 に「縮」。⑦【馬のり衣】*「原」では「衣」に「ぎ」とルビあり。【薄
 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨
 ぎぬ】薄絹「塵」。【被りし】被りたる「塵」。【構】構「縮」。⑧【い
 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨
 さましき】勇ましき「塵」。

〈4〉「殊なるゝたに心留めたまふものかる」。といひて軽く吾肩を拍ちし長き八字髭の明色を
 ①

る少年士官は、わが大隊の本部とつけられたる中尉にて、男爵フオン、メエルハイムといふ人あり。「うしこあるハ我が識れるデウベンの城のぬしビュロウ伯が一族あり。本部のこよひの宿はかの城と定まりたれば、君も人々に交りたまふたつきあらむ」。と言畢る時獵兵やうくわが左翼に迫るを見て、メエルハイムは馳去りぬ。この人と我が交りそめしは、まだ久しからぬ程あれど、善き性とわもはれぬ。

①【ものかる】。ものかな。「縮】。【吾肩】我肩【塵】。【拍ちらむ】。【あらむ】。「原・美・改・縮】あらむ、「【塵】。【と言畢るし】拍ちし【案】拍ちし【原】。③【ビュロウ伯】ビュロウ伯【塵】。時獵兵【言畢るとき獵兵【案】と言畢るとき獵兵【原】と言畢る時、獵兵【塵】*【美・改・縮】では「と言畢る時」の前で改行されている。

④【定まりたれば】定まりたれど【原】定まりたれば【塵・縮】。【あ兵【塵】*【美・改・縮】では「と言畢る時」の前で改行されている。

⑤寄手丘よせてをかの下まで進みて、けふの演習をはり、例の審判しんぱんも果つるほどに、われはメエルハイムと俱に大隊長の後しりへにつきて、こよひの宿へいそぎゆくに、中高に造りし「シヨツセエ」道美しく切株きりなぶ残れる麥畑の間をうねりて、をりく水音の耳に入るは、木立のあゝたを流るゝムルデ河に近づきしあるべし。大隊長は四十の上を三つ四つも躰たもとはたらむとわもはるゝ人にて、髪はまだふかき禿かちいろを失はねど、その赤き面おもてを見れば、はや額の波なみいぢるし。質朴しつぽくなれば言葉ことばすくゝきに、二言三言めゝハ、「われ一個人いっこじんにとりては」とことわる癖くせあり。遽たちにメエルハイムのかたへ向きて、「君がいひなづけの妻の待ちてやあるらむ」といひぬ。「許し玉へ、少佐の君。われにはまだ結髪むすみげの妻といふものなし」。「さなりや。我言をあしう思ひとり玉ふな。イ、ダの君を、われ一個人にとりては斯かくおもひぬ」。

②【道美しく切株】道美しく、切株【原】*【原】では「道美」に「みちうつく」とルビあり。③【間を】間に【縮】。【あゝたを】彼方を【塵】。

【流るゝ】流るる【縮】。④【近づきしあるべし】近づきたるなるべし ものなし。【いふものなし。】「原・美・改・塵・縮」。⑨【おもひ
 【塵】。⑤【質朴】質樸【塵】。⑦【いひあづけ】ゆひなづけ【案】。ぬ。【おもひぬ。】「原・美・改・塵・縮」。
 【あるらむ】、と【あるらむ、】と【原・美・改・塵・縮】。⑧【いふ

〈6〉かく二人の物語する間に、道はデウベン城の前にいでぬ。園をかこめる低き鐵柵をみぎひだ
 りに結ひし眞砂路一線に長く、その果つるところに舊りたる石門あり。入りて見れば、しろ
 木樅の花咲きみだれたる奥に、白堊塗りたる瓦葺の高どのあり。その南のかたに高き石の塔
 ありて埃及の尖塔にあらひて造りしと覺ゆ。けふの泊のどを知りて出迎へし「リフレエ」着
 たる下部に引かれて、白石の階のぼりゆくとき、園の木立を洩るゝ夕日朱の如く赤く、階の
 兩側に蹲りたる人首獅身の「スフィンクス」を照したり。わがはじめて入る獨逸貴族の城の
 さまいかあらむ。さきに遠く望みし馬上の美人はいゝるある人にや。これらも皆解きあへぬ謎
 あるべし

①*【塵・縮】では「かく二人の」の前で改行されず前節に続いている 【造りしと】造れりと【美・改・塵・縮】。⑤【洩るゝ夕日】洩るゆふ
 「美・改」では前節末の「欺くおもひぬ。」が行末に位置するため改行 日【改・塵・縮】。⑦【人にや】人にか【美・改・塵・縮】。⑧【ある
 の有無は不詳。【前に】前へ【案】。②【一線】*【原】のルビは「い べし】なるべし。【原・美・改・塵・縮】。
 ひずぢ】。④【ありて埃及の】ありて、埃及の【原】あるは埃及の【塵】。

〈7〉四方の壁と穹窿とには、鬼神龍蛇さまぐの形を畫き、「トルウへ」といふ長櫃めきたるも
 のをところぐに据ゑ、柱には刻みたる獸の首、古代の楯、打物などを懸けつらねたる間、
 いくつゝ過ぎて、樓上に引かれぬ。

<8> ビュロウ伯は常の服とねぼしき黒の上衣うはぎのいと寛ひろきに着更きかへて、伯爵夫人とゞもにこゝに居り、かねて相識れる中なれば、大隊長と心よげに握手あくしゅし、われをも引合はさせて、胸の底より出づるやうなる聲にてみづから名乗り、メエルハイムには「よくぞ来玉ひし」、と軽く會い釋しやくしぬ。夫人は伯よりわいたりと見ゆばかりに起居たぢみ重おもけれど、こゝろの優やさしさ目の色に出でたり。メエルハイムを傍へ呼びて、何やらむしほしさゝやぐほどに、伯は「けふの疲さぞあらむ。まかりて憩ひ玉へ」。と人して部屋へ誘はせぬ。

① ② ③ ④ ⑤ ⑥

①【ビュロウ伯】ビュロオ伯「塵」。【寛き】*「原」のルビは「いろ」。縮。⑤【さゝやぐ】さゝやく「塵・縮」。【伯は】伯。「改・塵・縮」。
 【居り、】居り。【縮】。③【名乗り】名告り「塵」。【来玉ひし】、⑥【憩ひ玉へ】。と【憩ひ玉へ】。と【原・縮】。
 と【来玉ひし】と【縮】。④【見ゆばかりに】見ゆるほどに【改・塵・

<9> われとメエルハイムとは一つ部屋にて東向ひがしむきあり。ムルデの河波は窓の直下ちよくかのいしづゑを洗ひて、むかひの岸の草くさむらは緑みどりまだあせせ。そのうしろある柏の林にゆふ霽もやかゝれり。流ながれての方にて折れ、こゑたの陸くがひ膝ひざがしらの如く出でたるところに田舎家二三軒ありて、眞黒まぐろある粉こなひき車の輪なかせら中空なかせらに聳たつは、ゆん手には水みづ枕のぞみてつき出したる高殿の一間あり。この「バルコン」めきたるところの窓、打見るほどに開きて、少女のかしら三つ四つ、をり疊かさねありてこゑたを覗のぞきしが、白き馬に騎りたりし人はあらざりき。軍服たつひづくえぬぎて盥卓たらいの傍へ倚よらむとせしメエルハイムは、「かしこは若き婦人がたの居間あり、無禮むれいあれどその窓の戸と疾はやくさしてよ」、とゝれに請ひぬ。

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧

②【草むらは】浅茅生は「案」**草むらは**「原」。*「案」のルビは「あさぐさふ」。【かゝれり】かゞれり「原」。③【膝がしら】膝がしら「原」。⑦【さしてよ、と】さしてよ、「と」【原】。

〈10〉日暮れて食堂に招かれ、メエルハイムと俱にゆくをり、「この家に若き姫達の多きとよ」、
①と占問ひしに、「もと六人ありしが、一人は吾友あるフアブリス伯に嫁ぎて、のこれるは
②五人あり」、**「フアブリスとは國務大臣の家ならずや」**。「さなり、大臣の夫人はこゝの
③あるじの姉にて、吾友といふハ大臣のよつぎの子あり」。
④

①【多きとよ、と】多きとよ、「と」【原】多きとよと、「塵」。②とは「案」**「フアブリス」**とは「原」*「原」は「案」の誤記を訂正。
【占問ひしに、】問ひけるに。「改・縮」問ひつるに。「塵」。【のこ
れるは】残れるは「縮」。③【五人あり、】五人あり。「原・縮」子なり。「原・美・改・塵・縮」。
五人なり。「美・改・塵」。【**「フアブリスとは」**「フアブリス」

〈11〉食卓に就きてみれば、五人の姫達みゑもひくの粧したる、その美しさいづればあらぬに、
①上の一人の上衣も裳も黒きを着たるさま、めづらしと見れば、これをむさきに白き馬に騎り
②たりし人ありける。外の姫たちは日本人めづらしく、伯爵夫人の王が軍服褒めたまふ言葉の
③尾につきて、「黒き地に黒き紐つけたれば、**ブラウンシユワイヒの士官に似たり**」、と一人
④いへば、桃色の顔したる末の姫、「さにててもなし」、とまだいわけなくもいやしむいろえ包
⑤までいふに、皆をかしさに堪へねば、あかめし顔を汁盛りし皿の上に低れたれど、黒き衣の
⑥姫は睫だに動きざりき。暫しありて穉き姫、さきの罪購はむとやれもひけむ、「されどかの
⑦君の軍服は上も下もくろけれバイ、**ダヤ**好みたまはむ」、といふを聞きて、黒き衣の姫振向
⑧

きて睨みぬ。この目は常にをち方にのみ迷ふやうなれど、一たび人の面に向ひては、言葉にも増して心をあらはせり。いま睨みしさまは笑を帯びて呵りしと覺ゆ。 ⑩ ⑨

②【めづらしと】めづらしと【縮】。【これをむ】これなん「美・改・塵・縮」。④【紐つけたれば】紐つきたれば「塵」。【似たり、と】似たり、「と」【原】。⑤【さにても】さよてな【案】さにても【原】。【あし、と】なし、「と」【塵・縮】。【いやしむ】卑しむ【案】【いやしむ】原。⑥【盛りし】盛れる【塵】。【低叱りきと】縮】。⑧【くろければ】くろければ、【原】黒れたれど【低れぬれど】【塵】。⑨【たまはむ】、【たまはむ】、「原・美・改・塵・縮】。⑩【向ひては、言葉】向ひては言葉【塵】。⑩【睨みしさまは】睨みしは【案】睨みしさまは【原】。【呵りしと】呵りきと【美・改・塵】

〈12〉われはこの末の姫の言葉にて知りぬ、さきに大隊長がメルハイムのいひをづけの妻をらむといひしイ、ダの君とは、この人のとあるをかく心づきてみれば、メルハイムがこと葉も振舞も、この君をうやまひ愛づると見はぬはあし。さては此中はビュロウ伯夫婦もこゝろに許したまふるべし。イ、ダといふ姫は丈高く瘦肉にて、五人の若き貴婦人のうち、此君のみ髪黒し。かの善くものいふ目を余所にしては、何かの姫たちに立ちこえて美しとれもふところもなく、眉の間にはいつも皺少しあり。面のいろいろの蒼う見ゆるは、黒き衣のためにや。 ⑥ ⑤ ④ ③ ② ①

①*「塵・縮」では「われは」の前で改行されず前節に続いている「美・改」では前節末の「覺ゆ。」が行末に位置するため改行の有無は不詳。【改・塵・縮】。③【愛つると】愛つと【美・改・塵・縮】。【ビュロウ伯】をかく【となるを。かく【原・美・改・塵・縮】。【こと葉】言葉【美・改・塵・縮】。④【丈高く】丈高く【原】。⑤【何かの】外の【塵】。【いひをづけ】ゆひなづけ【案】。【妻をらむ】妻ならん【縮】。②【とある】ビュロウ伯【塵】。④【丈高く】丈高く【原】。⑤【何かの】外の【塵】。

〈13〉食終りてつぎの間にいづれば、こゝはちひさき座敷めきたるところにて、軟き椅子、「ゾフ ①

ア」などの脚きはめて短きをわほく据ゑたり。こゝにて咖啡の饗應あり。給仕のをとこ小蓋に焼酎のたぐひいくつか注いだるを持ってく。あるじの外には誰も取らず、たゞ大隊長のみは、
 「われ一個人にとりては『シャルトリヨオス』をこそ」、とて一息々飲みぬ。此時わが立ちし背のほの暗きかたにて、「一個人、一個人」とあやしき聲して呼ぶものあるに、わどろきて顧みれば、この間の隅にはおほいなる鍼がねの籠ありて、そが中なる鸚鵡、かねて聞きしとある大隊長のこと葉をまねびしかりけり。姫達、「あゝ生憎の鳥や」とつぶやけば、大隊長もみづからこわ高に笑ひぬ。

①【ソファ】ソファ「縮」。②【脚きはめて】脚はきはめて「縮」。【据 ズ】「改・塵」シャルトリヨオズ「縮」。【をこそ】、「こそ」、「原」
 ゑたり」据はたり「案」据ゑたり「原」。【咖啡】珈琲「塵」。③【外 をこそ】、「縮」。【此時】この時「原」。④【鸚鵡、かねて】鸚鵡が
 には】外々は「原」。④【『シャルトリヨオス』】『シャルトリヨオ かねて「縮」。⑦【つぶやけば】つぶやくば「案」つぶや
 けは「原」。

〈14〉主人は大隊長と巻烟草喫みて、銃獵の話せばやと、小部屋のうたへゆく程々、それはさきよりこゑたを打守りて、めづらしき日本人にもいひたげある末の姫に向ひて、「このさかしき鳥はわん身のにや」、とゑみつゝ問へば、「否、誰のとも定らねど、われも愛でたきものにこそ思ひ侍れ。さゝつ頃までは、鳩あまた飼ひしが、あまり々馴れて、身に縋はるものをば、イ、ダいたく嫌へば、皆人に取らせつ。この鸚鵡のみは、いかにしてかあの姉君を憎めるがこぼれ幸ひて、いまも飼はれ侍り、さゝららずや」と鸚鵡のかたへ首さしいだしていふに、姉君憎むてふ鳥は、まがりたる嘴をひらきて、「さゝららずや、さゝららずや」と繰返しぬ。

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧

②【めづらしき】珍らしき「塵」。【いひたげ】いひたけ「縮」。③【おん身のにや」と「おん身のよや」と「原」。【問へば】問へば。【美・改・塵・縮】。【定らねど】定まらねど「原」。④【馴れて、身に【馴れて身に「縮】。【榮はるものをば、イ、ダ】榮はるものをばイ、

ダ「塵」。⑥【いまも】今も「塵」。【飼はれ侍り、飼ひ侍り。【飼はれ侍り。【原】飼はれ侍り。【美・改・塵・縮】。【さならずや】。【さならずや】。「原】。⑦【姉君】姉君「縮】。【ひらきて】開きて「塵」。

〈15〉

この隙にメルハイムはイ、ダひめの傍に居寄りて、あり事をうこひ求むれど、溢りてうけひりざりしに伯爵夫人もこと葉を添へたまふと見しが、姫つと立ちて「ピヤノ」にむかひぬ。下部いそがはしく燭をみぎひだりに立つれば、メルハイムは「いづれの譜をかまゐらすべき」と樂器のかたはらある小卓こつくああゆみ寄らむとせしに、イ、ダ姫「やうをし」と辞いろひて、おもむろに下す指尖木端ゆびさきタスデンに觸れて起すや金石の響。しらべ繁くありまさるにつれて、あさ霞の如きいろ、姫が臉けんさいに顯あらはれ來つ。ゆるらかに幾尺の水晶の念珠ねんじゆを引くときは、ムルデムルデの河もしバシ流をとどむべく、忽ち迫りて刀槍とうさう齊く鳴るときは、むかし行旅こうりよを脅おびやかし、この城の遠とほつ祖おやも百年の夢を破られやせむ。あはれ、この少女をとめのこゝろは恆に狭き胸の内に閉ぢられて、こと葉とありてあらはるゝ便たつきなければ、その織せんく々たる指頭しとうよりほとばしり出づるにやあらむ。唯覺きよくまゆ、絲聲しせいの波はこのデウベン城をたゞよはせて、人もわれも浮きつ沈みつ流れゆくを。曲正きよくまに闌まにありて、この樂器のうち久潜ひそみしさまぐの絃いとの鬼、ひとりぐに窮きはなき怨を訴へをはりて、いまや諸聲もろこゑたてゝ泣響なきじよむやうなるとき、愕おどろかしや、城外に笛ねの音起りて、たどぐしうも姫グ「ピヤノ」にあはせむとす。

⑬ ⑫ ⑪ ⑩ ⑨ ⑧ ⑦ ⑥ ⑤ ④ ③ ② ①

①【あり事をう】なに事か「縮】。【求むれど】求むれと「美・改・縮】。【うけひりざりしに伯爵】うけひかざりしに、伯爵「原・美・改・塵】。

②【こと葉】言葉「美・改・塵・縮」。【添へたまふ】添へ玉ふ「塵」。
 【見しが】見えしが「塵」。【ピアノ】ピアノ「縮」。③【譜をかまひ
 らす】譜をよみらす「案」。【べき】、「と」べきや、「と」【案】べき、「
 と」縮。④【あゆみ寄らむ】よ〇み寄らむ「案」**あゆ**み寄らむ「原」
 歩み寄らむ「縮」。【「やうなし」と辞ひて】「えうなし」と辞ひて「案」
 「**やう**なし」と辞ひて「原」「否、譜なくても」とて「塵」「譜なく
 とも」と辞ひて「縮」。⑥【いろ】色「原・縮」。【顯れ來つ】あらは
 れ來つ「原」。【念珠を引く】念珠を繰る「縮」。⑧【恆に】恒よ「原」。
 ⑨【出づるにや】出づよや「案」。⑩【ひとりく】ひとりく「美・
 改」。⑫【泣響】*「美・改・塵・縮」には「なきとよ」とルビあり。
 【訝かしや】訝かしや「塵・縮」。【たどぐしうも】たどぐしう
 も「縮」。⑬【ピアノ】ピアノ「縮」。【あはせむと】あはせんと
 「縮」。

〈16〉弾じほれたるイ、ダ姫は、暫く心附かでありしが、かの笛の音ふと耳に入りしと覺しく遽に
 しらべを乱して、樂器がくきの筐も碎くるやうある音ねをせさせ、座を起ちたるおもては、常より蒼
 かりき。姫たち顔見合して、「また缺唇いぐちのをこなる業わざしけるよ」、とさゝやぐほどに、外な
 る笛の音絶えぬ。
 ④ ③ ② ①

①【入りしと】入りぬと「美・改・塵・縮」。②【乱して】亂りて「改・
 塵・縮」。【起ちたる】起ちし「案」。③【見合して】見合せて「美・
 改・塵・縮」。【また】又「塵」。【しけるよ、と】しけるよ、と
 「塵」しけるよ、」と【縮】。【さゝやぐ】さゝやく「塵・縮」。

〈17〉主人の伯は小部屋より出で、物くるほしきイ、ダが當座の曲は、いつものとにて珍らし
 からねど、君はさこそ驚きたまひけめ、とわれに會釋しぬ。
 ② ①

①【物くるほしき】物くるをしき「案」。②【たまひけめ、と】たまひけめ、」と「原・縮」。

〈18〉 絶はしものゝ音わが耳にはあは聞はて、うつゝごゝろをらず部屋へ還りしぐ、こよひ見聞し
 ① とに心奪はれていもねられず、床をあらべしメエルハイムを見れば、これもまだ醒めたり。
 ② 問はまほしきとはきはあれど、流石に憚るところをきにあらねば、「さきの怪しき笛の音は
 ③ 誰が出しゝか知りてやおはする」と僅にいふに、男爵だんしやくこなたに向きて、「それにつきては
 ④ 一條ひしんたりのもの語あり、われもこよひは何ゆゑか寝られねば、起きてゝたり聞かせむ」と諾うべな
 ⑤ ひぬ。
 ⑥

②【いもねられず、】いもねられず。「原・美・改・塵・縮」。④【知 と「縮」。⑤【寝られ】寐られ「原」寐られ「塵・縮」。【ゝたり】語
 りてやおはする」と【知りてやおはす」と「案」知りてやおはする、】り「塵」。【聞かせむ」と【聞かせむ」と「塵」聞かせむ、】と「縮」。

〈19〉 われ等はまだ煖まらぬ臥床を降りて、まどの下もとある小机にゐむゝひ、烟草くつゆ燻らすほどに、
 ① さきの笛の音、また窓の外とにこりて、乍ち断はたちまち續き、ひを鶯うぐひすのこゝろみに鳴く如
 ② し。メエルハイムは警咳しほなきして語りいでぬ。
 ③

①【われ等】我等「縮」。【燻らすほどに】燻らす程に「塵」。

〈20〉 「十年とせばかり前のとあるべし、こゝより遠からぬブリヨオゼンといふ村にあはれある孤あり
 ① けり。六つ七つとのとき流行の時疫じはきにふた親みあゝくありしに、缺唇けつしんにていと醜みにくかりければ、
 ② かへりみるものあくほとく饑うゑに迫りしが、ある日麵包ぱんの乾きしやあると、この城へもとめ
 ③

に來ぬ。その頃イ、ダの君はとをばかりありしが、あはれがりて物とらせつ、玩もてあそびの笛ありしを與へて、『これ吹いて見よ』、といへど、缺唇けつしんあればはにからまず。イ、ダの君、『あの見ぐるしき口くちをほして得させよ』、とむつりりて止まず。母ある夫人聞きて、幼きものゝ心やさしうかくいふなればとて醫師くすしして縫はせ玉ひぬ。」

④ ⑤ ⑥ ⑦

①【十年】*「原」ではルビは「とゞぜ」。③【乾きしや】乾きたるや
 「塵」。④【この城】此城「塵」。④【とらせつ、】とらせつ。【美・改・
 塵・縮】。⑤【『これ吹いて見よ』、と】「これ吹いて見よ、」と「縮」。て醫師くすしなればとて、醫師「原」。【玉ひぬ】。【玉ひぬ】。「原・縮」。
 【にからまず】えからまず「原・縮」えからまず「塵」。【『あの見ぐるしき
 口をほして得させよ』、と】「あの見ぐるしき口をほして得させよ」、
 と「縮」。⑥【やさしうかくいふ】やさしういふ「塵」。⑦【なればと
 て醫師くすしなればとて、醫師「原」。【玉ひぬ】。【玉ひぬ】。「原・縮」。

〈21〉 「その時よりの童は城にとゞまりて、羊飼とありしが、賜はりしもてあそびの笛を離さず、後にはみづから木を削りて笛を作り、ひたすら吹きならふほどに、たれ教ふるものなけれど、自然にかゝる音色を出すやうにありぬ。」

③ ② ①

③【ありぬ】。「なりぬ。」。「原・縮」。

〈22〉 「一昨年の夏わが休暇きゅうかたまはりてこゝに來たりし頃、城の一族とほ乗せむとて出でしが、イ、ダの君きみが白き駒こますぐれて疾はやく、われのみみ繼つきゆくをり、狭き道のまがり角かくまにて、かれ草うづ高く積みし荷車にに逢ひぬ。馬はおびおびはて一躍ひととびし、姫ハ辛からうじて鞍くらにこらへたり。わがすくひにゆりむとするを待たで、傍かたある高草の裡うちにあと叫ぶ聲こゑすと聞く間まに、羊飼の童飛ぶごとくに馳かり、姫が馬の轡くわぎは緊しかと握りておし鎮めぬ。この童が牧場まきばのいとまだにあれば、

⑤ ④ ③ ② ①

見江がくれにわが跡慕ふを、姫これより知りて、人してものかづけなどはし玉ひしが、いか
 なる故にか、目通めとほりを許されず。童も姫がたまくと逢ひても、こと葉はつけたまはぬにて、木の
 れを嫌ひ玉ふと知り、はてはみづから避くるやうにありしが、いまでも遠とほきわたりより守るこ
 とを忘れず、好みて姫が住める部屋へやの窓の下に小舟こぶね繋ぎて、夜も枯草かれくさの裡に眠れり。」
 ⑨

①【とほませむとて出でしが】とほませむと出でしが「塵」。③【積み
 し】積める「塵」。【辛うじて】辛うして「塵」。④【裡に】裏に「塵」。⑤【この童】此の童「塵」。⑦【故にか】故にや「案」。【許されず。】
 許されず、「塵」。⑨【眠れり。】「眠れり」。【美・改・塵】。

〈23〉聞畢りて眠に就くころは、ひがし窓の硝子がらすはやほの暗うありて、笛の音も斷江たりしが、こ
 の夜イ、夕姫ゆひめも影に見ぬ。その騎りたる馬のみるく黒くあるを、怪しと朧もひて善く
 視れば、人の面にて缺唇いぐちなり。されど夢ごころには、姫がこれに騎りたるを、よのつねの事
 のやうに覺えて、しばしまた眺ながめたるに、姫と朧もひしは「スフィンクス」の首にて瞳ひとみをき
 目めかバ開きたり。馬と見しは前足まへあし朧となしく並べたる獅子あり。さてこの「スフィンクス」
 の頭かしらの上には、鸚鵡止まりて、わが面おもてを見て笑ふさまいと憎にくし。
 ⑥ ⑤

①【聞畢りて】聞き畢りて「塵」。【ひがし窓の硝子はやほの暗うあり
 て】月はやし窓の硝子がらすきらめきて「案」
 ひがし窓の硝子はやほ
 の暗うありて「原」。④【首にて瞳をき目】首にて、瞳なき目「原」
 美・改・塵・縮。

〈24〉つとめて起き、窓まどをしあくれば、朝日の光對岸あかりむかうぎしの林を染め、微風びふうハムルデの河づらに細紋さいもんを
 多おほがき、水に近き草原には、ひと群の羊あり。萌黄色もえぎいろの「キツテル」といふ衣短く、黒き臍すね
 ② ①

をあらはしたる童、身の丈きはめて低きぢ、わどろをす赤き髪ふり乱して、手に持ちし鞭面むち白げに鳴らしぬ。

①【ムルデ】ムルデ【原】ムルデ【縮】。③【身の丈】身の丈【原】。しろげゝ【原】。

【赤き髪】赤髪【塵】。【持ちし】持たる【塵】。【面白げに】おも

(25) この日は朝の咖啡かっふほほを部屋にて飲み、晝頃大隊長と俱にグリンマといふところの銃獵仲間の會堂どうにゆきて演習はんしゅうみに來たまひたる國王の宴はんにあづかるべき筈はずをれば、正服せいふく着て待つほどに、あるじの伯は馬車を借して階の上まで見送りぬ。われは外國士官といふをもて、將官、佐官をのみつどふるけふの會に招かれしが、メルハイムは城に残りき。田舎いんかをれど會堂どうもひの外に美しく、食卓の器は王宮よりはこび來しとて、純銀の皿、マイセン燒やきの陶たわものなどあり。この國のやき物は東洋のを粉本ほんにせしといへど、染ぞいだしたる草花などの色は、我邦などのものに似もやらず。されどドレステンの宮には、陶ものま間といふありて、支那日本の花瓶の類たぐひもほかた備れりとぞいふある。國王陛下こくわうにはいま始めて謁見す。すがた貌かたちやさしき白髪しろがみの翁おきなにて、ダンテの神曲ゴッティ、コメヂヤ譯したまひしといふヨハン王のたね裔うらをればにや、應接いと巧にて、「わがザツクセンに日本の公使置かれむをりは、いまの好よしみにて、わん身の來るを待たむ、ちど懇こんに聞きはさせ玉ふ。わが邦にてハ舊ふるきよしみある人をとて、御使みつかひ撰ひらはるゝやうある例ためしなく、かゝる任にんに當るには、別に履歷りれきなうてハ協あはぬとを、知ろしめさぬあるべし。こゝにつどひし將校しょうこう百三十餘人の中にて、騎兵の服き着きたる老將官の貌かたちきはめて魁偉くわいなるハ、國務大臣くわつじんフアブリス伯はくありき。

⑭

⑬

⑫

⑪

⑩

⑨

⑧

⑦

⑥

⑤

④

③

②

①

①【咖啡】珈琲「塵」。【晝頃】午頃「塵」。【銃獵仲間の】銃獵の間の「塵」。②【ゆきて演習】ゆきて、演習「原」。【みに來たまひたる】見に來たまひぬる「塵」。⑤【はこび來しとて】はこび來ぬとて「美・改・塵・縮」。【マイセン】アイセン「案」【マイセン】「原」。⑥【東洋のを】東洋を「案」東洋のを「原」。【せしと】しつと「塵」。⑧

【おほかた】をさく「案」【おほくと】「原」。⑨【譯したまひし】譯したまひき「美・改・塵・縮」。⑩【來る】來む「塵」。【待たむ】、
 ちど【待たむ】、
 など【縮】。⑪【撰はるゝ】選ばるゝ【縮】。⑫【協はぬ】協はぬ【縮】。【こゝにつどひし】こゝにつどへる【塵】。

(26) 夕暮に城にかへれば、少女等の笑ひさゞめく聲、石門の外まで聞ゆ。馬車停むるところへ、
 ①
 はや馴染みし末の姫走りきて、「姉君たち『クロケット』の遊したまへば、おん身も夥にとり
 ②
 りたまはずや」とわれに勧めぬ。大隊長は「姫君の機嫌損じたまふる。われ一人にとり
 ③
 てハ、衣脱ぎりへて憩ふべし」といふをあとに聞きなして隨行くに、尖塔の下の園にて姫
 ④
 たちいま遊の最中あり。芝生のところゝに黒がねの弓伏せて植ゑおき、靴の尖におさへし
 ⑤
 五色の球を、小搥揮つて横ざまに打ち、の弓の下をくゞらすに、巧なるは百に一つをも
 ⑥
 失はねど、拙きハあやまちて足おど撃ちぬとてあわてふためく。われも正劍解いてこれに雜
 ⑦
 り、打てども打てども、球あらぬ方へのみ飛ぶぞ本意なき。姫たち聲を併せて笑ふところへ、
 ⑧
 イ、ダ姫メエルハイムが肘に指尖掛けてりへりしが、うち解けたりとおもふさまも見えず。
 ⑨

①【かへれば】かへれば【縮】。【馬車】車【塵】。②【はや】たや【縮】。【勧めぬ】
 【勧めぬ】は誤植。【馴染みし】馴れたる【塵】。【走りきて】走り來て
 【塵】。【『クロケット』】クロケット【縮】。【遊したまへば】遊し
 たまへば【原】。【夥に】*【塵】では「夥」に「なかま」とルビあり。
 【おりたまはずや】、と【おりたまはずや】、と【縮】。③【勧めぬ】
 勧めぬ【塵】。【大隊長は】大隊長。【改・塵・縮】。④【憩ふべし】、
 と【憩ふべし】。と【改・塵】憩ふべし。と【縮】。【尖塔】*【原】
 のルビは「ピラミッド」*【底】は誤植。【園にて姫】園にて、姫【原】。

⑤【遊】遊「原」。【靴の尖に】靴の尖もて「美・改・塵・縮」。【おさへし】押へし「美・改・縮」押へたる「塵」。⑥【小槌】小槌「原」。【横さまに】横さまに「塵」。【揮つて】揮ひて「塵・縮」。【横さまに】横さまに「塵」。【くゞらすに】くゞらすに「美・改・塵・縮」。【一つをも失はねど】一つを失はねど「塵」。⑦【足あと】足杯「美・改・塵・縮」。【解いて】解いて「原」。⑧【併せて】併して「美」。⑨【うち解けた】うち解けた「原」。

〈27〉

メエルハイムハわれに向ひて、「いかに、けふの宴うたげおもしろうりしや」と問ひかけて答を待たず、「われをも組入れたまへ」と群のかたへ歩みよりぬ。姫達は顔見あはして打笑ひ、「あろびには早はや倦うみたり。姉あねぎみと共にいづくへか往きたまひし」と問へば、「見晴らしよき岩角いそかどわたりまでゆきしが、この尖塔しんたうには若わろず。小林ぬしは明日あすわが隊あとゝもにムツチエンのうたへ立ちたまふべければ、君たちの中にて一人塔ひとりとうの顛いたゞきへ案内あゐし、粉ひき車こなのあゐたに、瀛車きしやの烟見ゆるところをも見せ玉はずや」といひぬ。

① ② ③ ④ ⑤ ⑥

①【おもしろうりしや」と】おもしろかりしや、「と」【塵・縮】。② 往きたまひし、「と」【縮】。④【まで】迄【縮】。【この尖塔】こゝの【組入れたまへ」と】組に入れたまへ、「と」【塵】組に入れたまへ、「と」【縮】。【かたへ】方へ【縮】。【見あはして】見あはせて【原・改・塵・縮】。③【倦みたり】倦みたり、「改・塵・縮」。【いづくへか】と【玉はずや、「と」【縮】。【往きたまひし】、「と」【原】

〈28〉

口疾くちきすゑの姫もまだ何とも答へぬ間に、「われこそ」といひしは、おもひも掛けぬイ、ダイ、ダ姫なり。物おほくいはぬ人の習ならひとて、遽たちに出しゝこと葉と共に、顔さと赤めしが、はや先に立ちて誘ふに、われは訝いぶかりながら随ひゆきぬ。あとにては姫達メエルハイムがめぐりに集ま

① ② ③

りて、「夕炊^{ゆふげ}までに朶もしろき話一つ聞かせ玉へ」、と迫りたりき。

④

③【訝りながら】訝りつつも「塵」。【隨ひゆきぬ】隨ひ行きぬ「塵」。

周圍に「縮」。④【夕炊】夕餉「美・改・塵・縮」。【朶もしろき】お

【あとにては姫達】あとにて姫は達「縮」*「縮」は誤植。【めぐりに】

もろしき「原」*「原」は誤記か。【玉へ、と】玉へ、「と」玉へ、「と」【縮】。

(29)

この塔は園に向きたるかたに、窪^{くぼ}みたる階^{かい}をつくりてその顛^{いたゞき}を平にしたれば、階段をのぼり
ホリする人も、顛に立ちたる人も下より明に見ゆべければ、イ、夕^{ゆふ}姫が事もなくみづから案^あ
内^{うち}せむといひしも、深く怪^{あやし}むに足らず。姫はほとく走るやうに塔の上口^{あがりぐち}にゆきて、こゝた
を顧みたれば、われも急ぎて追^{おひつ}付き、段の石をバ先に立ちて踏みはじめぬ。ひと足遅^{おく}れての
ぼり来る姫の息^{いき}促^{せま}りて苦しげなれば、あまたゝび休みて、漸^{おそ}う上にいたりて見るに、こゝは
朶もひの外に廣く、めぐりに低^ひき鐵欄干^{てつらんかん}をつくり、中央に大^{おほ}なる切石^{きりいし}一つ据^すゑたり。

① ② ③ ④ ⑤ ⑥

①【つくりてその】つくりて、その「原」。【顛】顛「縮」。②【顛】顛「縮」。

(30)

今やわれ下^げ界^{かい}を離^{はな}れたるこの塔^{とう}の顛^{いたゞき}にて、きのふラアゲ井^いツツの丘の上より遙^{しよたいめん}に初^{はつ}對^{たい}面^{めん}せし
ときより、怪^{あやし}しくもこゝろを引^ひかれて、いやしき物^{もの}好^{せき}にもあらず、いろなる心にもあらねど、
夢^{ゆめ}に見、現^{うつ}に朶もふ少女^{せうじゆ}と差^さ向^{むか}ひになりぬ。こゝより望^{のぞ}むべきザツクセン平野^{へいよ}のけしきは
かに美しくとも、茂^{さか}れる林もあるべく、深^{ふか}き淵もあるべしと朶もはるゝこの少女が心には、
いかでか若^{わか}かむ。

① ② ③ ④ ⑤

①【顛】巔「縮」。【ラアゲ井ツツ】ラアゲ井ツツ「塵」。②【あらず】
 あらず「美・改」。④【淵】淵「原」。【心には】心々「案」。⑤【い
 かでか】いかで「案」。【若かむ】若かむや「案」。

〈31〉
 險けはしく高き石級せききゆうをのぼり来て、臉かほにさしたる紅くわいの色まだ褪せめぬに、まばゆきばかりなる夕日
 の光に照されて、苦しき胸を鎮めむためにや、この顛の眞中まなかなる切石に腰うち掛け、
 物いふ目の瞳をきとわが面に注ぎしときは、常は見ば江せざりし姫なれど、さきに珍らしき
 空想くうさうの曲かなでし時にもまして美しきに、いかゝればか、某うれがしの刻きざみし墓上むじやうの石像せきざうに似たりと
 木もはれぬ。
 ⑤ ④ ③ ② ①

①【褪めぬに】褪せぬに「塵」。【まばゆきばかりなる】まばゆきほど
 なる「改・塵・縮」。【夕日】ゆふ日「改・塵・縮」。②【顛】巔「縮」。
 ③【目の瞳を】瞳を「縮」。④【似たりと】似たりとも「縮」。

〈32〉
 姫はこと葉忙せはしく、「われ君が心を知りての願ねがひあり。かくいはゞきのふはじめて相見て、こ
 と葉もまだかはさぬにいかでと怪み玉はむ。されどわれはたやすく惑ふものゝあらず。君
 演習えんしゅう濟すみてドレスデンにゆき玉はゞ、王宮にも招かれ國務大臣たたらの館たたらも迎へられ玉ふべし、
 といひかけ、衣きぬの間あひだより封じたる文を取とり出で、われに渡わたし、「これを人知れず大臣の夫人に
 届け玉へ、人知れず」と頼たのみぬ。大臣の夫人はこの君の伯母御にあたりて、姉君さへかの
 家にゆきておはすといふに、始て逢ひしこと國人の助を借らでものととなるべく、またこの城
 の人に知らせじととゐらば、ひそかに郵便に附しても善からむに、かく氣きをかねて希有けうある振ふる
 ⑦ ⑥ ⑤ ④ ③ ② ①

舞したまふを見れば、この姫こゝろ狂ひたるにはあらずやと朧もはれぬ。されどこはたゞま
 ⑧ 舞したまふを見れば、この姫こゝろ狂ひたるにはあらずやと朧もはれぬ。されどこはたゞま
 ⑨ 舞したまふを見れば、この姫こゝろ狂ひたるにはあらずやと朧もはれぬ。されどこはたゞま
 ⑩ 舞したまふを見れば、この姫こゝろ狂ひたるにはあらずやと朧もはれぬ。されどこはたゞま
 ⑪ 舞したまふを見れば、この姫こゝろ狂ひたるにはあらずやと朧もはれぬ。されどこはたゞま
 ⑫ 舞したまふを見れば、この姫こゝろ狂ひたるにはあらずやと朧もはれぬ。されどこはたゞま
 ⑬ 舞したまふを見れば、この姫こゝろ狂ひたるにはあらずやと朧もはれぬ。されどこはたゞま

①【忙しく、】忙しく。「美・改・塵・縮」。③【招かれ國務大臣】招
 かれ、國務大臣「原」。【玉ふべし、】と【玉ふべし、】と「原・縮」
 玉ふべし」と。「美・改・塵」。④【渡し、】これを【渡し、】これを「塵」。
 ⑤【人知れず、】と【人知れず、】と「原」人知れず、と「縮」。【大
 臣の】已れを聞きて、大臣の「案」。【あたりて】當れると「原」。【姉
 君】姉君「原・美・改・塵・縮」。⑥【始て逢ひし】始て逢へる「塵」。
 ⑦【附しても】附すとて「案」附しても「原」。⑧【朧もはれぬ】お
 ひやり玉へ。」と「縮」。

③③ 入日は城門近き木立より虹の如く洩るゝに、河霧のたち添ひて、朧ぼろげに
 ① 入日は城門近き木立より虹の如く洩るゝに、河霧のたち添ひて、朧ぼろげに
 ② 入日は城門近き木立より虹の如く洩るゝに、河霧のたち添ひて、朧ぼろげに
 ③ 入日は城門近き木立より虹の如く洩るゝに、河霧のたち添ひて、朧ぼろげに
 ④ 入日は城門近き木立より虹の如く洩るゝに、河霧のたち添ひて、朧ぼろげに

①【城門近き木立より】向ひの林の隙間より【案】城門近き木立より
 「原」城門近き木より「塵・縮」。「洩るゝに」洩るゝ【案】洩れたる
 に「改・縮」洩りたるに「塵」。「河霧のたち添ひて」河霧たち添ひて
 「改・塵・縮」。「おぼろげ」おぼろげ【改・塵】。②【きゝはてゝ】
 ききはてゝ「塵」。「待受」*「底」のルビ「まけう」は誤植「原」の
 ルビは「まちう」。「かゝやがしたる」かがやかしたる「改・縮」かゝ
 やかしたる「塵」。

〈34〉あくる朝ムツチエンのかたへこゝろざしてこゝを立ちぬ。①

①【あくる朝】あくる朝、「原」。「かたへ」かたを「美・改・塵・縮」。

※ ※ ※ ※ ※

〈35〉秋の演習はこれより五日ばかりにて終り、わが隊はド레스デンにかへりしかバ、われはゼ
 エ、ストラアセある館をたづねて、さきにフオン、ビュロウ伯が娘イ、ダ姫に誓ひしとを果
 さむとせしが、固よりところの習にては、冬とありて交際の時節來ぬ内、うゝる貴人に逢は
 むとたやすからず、隊附の士官などの常の訪問といふは、玄關の傍ある一間に延かれて、名
 簿に筆染むるとなればおもふのみにて止みぬ。⑤ ④ ③ ② ①

①【秋の演習】秋季演習「原」。「原」のルビは「しゆうきはんしゆう」。
 ②【フオン、ビュロウ伯】フオン、ビュロウ伯「塵」。「イ、ダ姫」ビ、
 夕姫【案】イ、ダ姫「原」*【案】は誤記。③【冬とありて】冬にあり
 て「美・改・塵・縮」。④【染むるとなればおもふ】染むるとなれば、
 おもふ「原」。「止みぬ」罷みぬ「塵」。

〈36〉その年も隊務いそがはしき中に暮れて、エルベがは上流の雪消にはちす葉の如き氷塊、みど
 ①

りの波にたゞよふとき、王宮の新年はあぐしく、足元あやふき蠟磨きの寄木を踐み、國王のれん前近う進みて、正服うるはしき立姿を拜し、それよりふつう三日過ぎて、國務大臣フオン、フアブリス伯の夜會に招かれ、奥太利、パウリヤ、北亞米利加などの公使の挨拶をはりて、人々こほり菓子に匙を下す隙を覗ひ、伯爵夫人の傍に歩寄り、事のもと手短々陳べて、首尾好くイ、ダ姫が文をいたしぬ。

② ③ ④ ⑤ ⑥

①【雪消にはちす葉】雪消よ、はちす葉「原」。②【足元あやふき】足 改・塵・縮。【奥太利】澳太利「原」。【パウリヤ】パウリア「塵・もと危き」塵。③【進みて、】*「美」では読点「、」が「、」に左 縮。【など】杯「塵」。【をはりて】畢りて「美・改・塵・縮」。右逆転している。【拜し】拜し「原」。④【招かれ】招かれ、「原・美・

〈37〉

一月中旬入りて昇進任命などにあひし士官とにも、奥のれん目見江をゆるされ、正服着て宮に参り、人々と輪なりに一間に立ちて臨御を待つほどよ、ゆがみよるぼひたる式部官に案内せられて妃出でたまひ、式部官に名をいはせて、ひとりぐこと葉を掛け、手袋はづしたる右の手の甲々接吻せさせ玉ふ。妃は髪黒く丈低く、褐いろの御衣あまり見映せぬかほりには聲音いとやさしく、「れん身は佛蘭西の役に功ありしそれがしが族ありや」、など懇にもものし玉へバ、いづれも嬉しとれもふあるべし。したがひ來し式の女官は奥の入口の闕の上まで出で、右手に摺みたる扇を持ちたる儘に直立したる、その姿いとく氣高く、鴨居柱を欄にしたる一面の油畫に似たりけり。われハ心ともなくその面を見しに、この女官はイ、ダ姫なりき。こゝにはそもく奈何して。

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨

①【あひし】あへる「塵」。【士官とにも】士官とともに「縮」。【奥】王「案」奥「原」。②【待つほどよ】待つほどに「原・美・改・塵・

縮】*「底」は誤植。「ゆがみ」ゆかみ「原」。④【接吻せさせ玉ふ】
 接吻せしめ玉ふ「改・塵・縮」。【丈低く】丈低く「原」。【見映】*「底」
 のルビ「みほえ」は誤植「原」のルビは「みばえ」。【かはりにには聲音】
 かはりにには、聲音「原・塵」。⑤【族なりや、など】族なりや、「な
 ど」縮」。⑥【女官は奥の】女官は、奥の「原」。⑦【持ちたる】持ち
 し「案」。【氣高】*「原」のルビは「けだか」。⑧【油畫】畫圖「塵」。

※ ※ ※ ※ ※

⑶ 王都わうとの中央ちゆうわうにてエルベ河を横てつぎやうぎる鐵橋の上より望めバ、シユロス、ガツセまたがに跨りたる王宮の
 窓、こよひハ殊更にひかりうゝやぎたり。われも數には漏れで、けふの舞踏會にまねられ
 たれば、アウグスツスの廣こうぢに餘りて列をれつあしたる馬車の間をくゞり、いま玄關に横づ
 けにせし一輛より出でたる貴婦人、毛革けがはの肩掛かたかけを隨身ずあしんにわたして車箱しゃせうの裡へかくさせ、美し
 くゆひ上げたるこがね色の髪と、まバゆきまで白き領とを露して、車の扉開とびらひらきし劍佩けんおびたる
 殿守とのもりをかへりみもせで入りし跡にて、その乗りたりし車はまだ動かず、次に待ちたる車もま
 だ寄せぬ間まをはかり、槍取りやりとて左右さいうにあらびたる熊毛くまけ整かぶとの近衛卒このえいの前を過ぎ、赤き氈せんを一筋
 に敷きたる大理石まあぶるの階かいをのぼりぬ。階の兩側ふたがはのところくには、黄羅紗きらしやにミどりと白との縁ふち
 取とりしたる「リフレエ」を着きて、濃紫こきむらさきの袴こまわらひを穿きいたる男、項かを屈かめて瞬またまもせぞ立ちたり。むゝ
 しはこゝに立つ人々のく手燭てしよく持もつ習なりしが、いま廊下ろうか、階段かいたんに瓦斯燈がすとう用もちゐるとゝなりて
 それは止みぬ。階の上うへある廣間ひろまよりは、古風こふうを存ぞんぜし弔燭臺つりしよくたいの黄蠟わうろうの火遠ひとほく光の波を漲たからせ、
 數知れぬ勳章、肩かたじるし、女服にようふくの飾かざりなどを射そて、祖先そぜんよゝの油畫あぶらえの肖像しやうしやうの間に挟はさまれたる大
 鏡かがみに照反てらかへへされたる、いへバ尋常よのつねあり。

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬

①【望めバ】のぞめば「縮」。【シユロス、ガツセ】シユロスガツセ「縮」。 ②【うゝやぎたり】かがやきたり「改・塵・縮」。 ③【アウグスツス】

アウグストス「原・美・改・塵」。④「わたしして車箱の」わたしして、車箱の「原」。⑤「佩びたる」佩びたる「原・美・改・塵・縮」*「底」は誤植。⑦「氈」氈「原」。⑧「のぼりぬ」のぼりぬ「美」。【兩側】*「原」のルビは「ふたかは」。【縁取りたる】縁取りたる「塵」。⑨「屈めて」*「原」のルビは「かど」。⑩「廊下」廊下「原・美・改・塵・縮」*「底」は誤植。【用ゐる】用ゆる「案」。【とゝなりてそれは】とゝなりて、それは「塵」。⑪【止みぬ】罷みぬ「塵」。【存ぜし】存せる「塵」。【弔燭臺】吊燭臺「美・改・縮」*「案」のルビ「つりしつゝい」は誤記「原」では「つりしよくだ」と訂正。【火遠く】火、遠く「原」。⑫【數知れぬ】數知らぬ「塵」。⑬【照反へされたる】照りへされたる「原」照反されたる「塵」。【尋常】世の常「原」*「原」はルビなし。

〈39〉

式部官が突く金總きんぐさついたる杖、「パルケツト」の板に觸れてとうくと鳴りひゞけば、天鵝絨とびらバリの扉とびら一時に音おともゑくさとあきて、廣間のまゑかに一條の道木のづから開ひらけ、こよひ六百人と聞きはし客、みゑくの字ありに身を曲まげ、背の中程までも截りあけてみせたる貴婦人の頸くび、錦絲きんしの縫摸ぬいも様ある軍人の襟、また明色ブロードの高髻たかまげなどの間を王族の一行過よりたまふ。眞先まさきにはむかしながらの卷毛まきげの大假髪おほかづらをかぶりたる舍人とねり二人、ひきつゞいて王妃兩陛下、ザツクセン、マイニンゲンのよつぎの君夫婦、ワイマル、シヨオンベルヒの兩公子、これにちもゑる女官數人隨へり。ザツクセン王宮の女官はみにくしといふ世の噂うわさむをしからず、いづれも顔かほ立だよからぬに、人の世の春さへはや過ぎたるが多く、ゑかにはわい皴しわみて肋わはら一つぐに數ふべき胸を、式しきゑればはも隠かくさで出したるゑどを、額越ひたいこしにうち見るほどに、心待せしその人は來ずして、一行はや果てゑむとす。そのときまだ年若き宮女一人、殿じんがりめきてゆたかに歩みくるを、それかあらぬかと打仰うちあふげば、これをむゝがイ、ダ姫ひめありける。

①【杖】杖「原」。【とうくと】とうくと「塵」。③【曲げ】曲 摸樣【縫摸樣】「原」。【高髻】高髻「原・美・改・塵・縮」。⑤【ひきげ】改*「改」では読点が脱落し、空白。④【頸】項「塵」。【縫 つゞいて】ひきつゞいて「塵」。⑧【一つぐに】一つぐに「美・改・

塵・縮」。①【これをむ】これなん「美・改・塵・縮」。

- 〈40〉王族廣間の上のはてに往着きたまひて、國々の公使、またハその夫人などこれを圍むとき、
① 〆初て高廓の上に控へたる狙撃聯隊の樂人がひと聲鳴らす鼓ととも「ポロ子エス」といふ
② 舞はじまりぬ。こハたゞ木のく右手にあひての婦人の指をつまみて、この間をひと周する
③ なり。列のかしらハ軍装したる國王、紅衣のマイニンゲン夫人を延き、つゞいて黄絹の裙引
④ 衣を召したる妃にならびしハマイニンゲンの公子なりき。僅に五十對ばかりの列めぐりをハ
⑤ るとき、妃は冠のまゐるしつきたる椅子に倚りて、公使の夫人達を側に居らせたまへば、國王
⑥ 向ひの座敷なる骨牌卓のかたへうつり玉ひぬ。
⑦

①【たまひて】玉ひて「塵」。②【高廓】高廓「原・美・改・塵・縮」*
③【マイニンゲンの公子】マイニンゲン公子「原」。【五十對ばかり】
④【底】は誤植。【ポロ子エス】ポロネエス「原」ポロ子エス「改」ポロ 五十對は〆り「原」*「原」は誤記。⑦【うつり玉ひぬ】まかり玉ひぬ
⑧【案】うつり玉ひぬ「原」。

- 〈41〉この時まことの舞踏はじまりて、群客たちこめたる中央の狭きところを、いと巧にめぐりあ
① りくを見れば、おほくハ少年士官の宮女達をあひ手にしたるなり。わがメエルハイムの見え
② ぬハいかにとおもひしが、げに近衛ならぬ士官ハおほむね招かれぬものと悟りぬ。さて
③ イ、ダ姫の舞ふさまいかにと、芝居にて鼻負の俳優みるこゝちしてうち護りたるに、胸にさ
④ うびの自然花を梢のまゝ着けたるほかに、飾といふべきもの一つもあらぬ水色ぎぬの裳裾、
⑤ 狭き間をくゞりながら撓まぬ輪を畫きて、金剛石の露翻るゝあだし貴婦人の服のにおもげなる
⑥

を欺きぬ。

⑦

③【招かれぬものを】招かれぬものを「原・美・改・塵・縮」*「底」
は誤植。④【最負】最負「塵・縮」。⑥【貴婦人】貴人「塵」。【服の襟】
もげなる「服おもげなる「縮」。

〈42〉

時遷るにつれて黄蠟の火ハ次第に炭の氣にけかかされて暗うなり、燭涙しよくろみながくしたゞりて、床
の上には断れたる紗、落ちたるはびら片あり。前坐敷の間食卓ビュウツエエにかよふ足やうく繁くありた
るをりしも、わが前をとほり過ぐるやうにして、小首かたぶけたる顔こゑたへふり向け、あ
かば開きしまひ扇に頤ほしごみのわたりを持たせて、「われをば早や見忘れやし玉ひつらむ」、とい
ふはイ、ダま姫あり。「いかで」といらへつゝ、二足三足跟つきてゆけば、「かしこなる陶物の
間見たまひしや。東洋産の花とうやう瓶に知らぬ草木鳥獸など染めつけたるを、われに釋ときあかさむ
人まねん身の外になし、いざ」、といひて伴ひゆきぬ。

⑦

⑥

⑤

④

③

②

①

②【はを片あり。】はな片ちりほひ、「案」はな片あり、「原」。【前】
坐敷「前座敷」塵」。④【開きし】開ける「塵・縮」。【頤】頤「原」
や。【見たまひしや、】見たまひしや、「改・塵・縮」。⑦【いざ」、と】
「いざ」と「縮」。

〈43〉

こゝは四方の壁に造付けたる白石の棚に、代々の君が美術に志ありてあつめたまひたる國々
のねほ花瓶、かぞふる指いとなきまで並べたるが、乳の如く白き、琉璃の如く碧き、さては
五色まばゆき蜀錦しよくきんのいろなるなど、蔭かげになりたる壁より浮きいでて美はし。されどこの宮居みやみ
に慣れたるまらうど達は、こよひこれに心留こころどむべくもあらねば、前坐敷まへざしきにゆきかふ人のをり

④

③

②

①

く見ゆるのみにて、足をとどむるものほとくななりき。

⑤

①【美術】工藝「縮」。【あつめたまひたる】あつめたまひし「案」あ
つめたまひぬる「塵」。②【いとなきまで】いとなき迄「塵」いとまな
きまで「縮」。③【浮きいでて】浮きいで、【原・縮】。「美はし」う
るはし「原」。④【前坐敷】前座敷「塵・縮」。⑤【見ゆるのみ】見ゆ
のみ「案」。

〈44〉 緋の淡き地にねなじいろの濃きから草織出したる長椅子に、姫は水いろぎぬの裳のけだりき
おほ襜の、舞の後ながらつゆ顔れぬを、身をひねりて横ざまに折りて腰掛け、斜に中の棚の
花瓶を扇の尖もてゆびざしてわれに語りはじめぬ。
③

③【ゆびざして】ゆびざして「塵・縮」。

〈45〉 「はや去年のむろしとなりぬ。ゆくりなく君を文づつひにして、みや申すたつきを得ざり
ければ、わが身の事いうにねもひとり玉ひけむ。されど我を煩惱の闇路よりすくひいで玉ひ
し君、心の中には片時も忘れ侍らず」。
③ ② ①

①【得ざりければ】得ざりければ「塵」。③【忘れ侍らず】。「忘れ侍
らず。」。「原・縮」。

〈46〉 「近比日本の風俗書きしふみ一つ二つ買はせて読みしに、おん國にては親の結ぶ縁ありて、
まことの愛知らぬ夫婦多しと、こなたの旅人のいやしむやうに記したるありしが、こハマだ
② ①

よくも考へぬ言にて、かゝるとはこの歐羅巴にもなりらずやは。いひあづけするまでの交際
 久しく、かたみに心の底まで知りあふ甲斐は否とも諾ともいはるゝ中にこそあらめ、貴族仲
 間にては早くより目上の人にきめられたる夫婦、こゝろ合はでも辞まむよしなきに、日々
 あひ見て忌むこゝろ飽くまでつゝのりし時、これに添はする習、さりとはことわりあの世や」。

③
④
⑤
⑥

①【縁ありて、】縁ありて【縮】。③【歐羅巴】*【原】のルビは「よ
 のルビは「ひと」。⑥【つゝのりし】募りたる【塵】。【世や】。【世や】。
 しろつぱ」。【いひあづけ】ゆひなづけ【案】。④【甲斐は否とも】
 【原・縮】。
 甲斐は、否とも【原】。⑤【辞まむ】いなよむ【原】。【日々】*【原】

〈47〉

「メエルハイムはわん身が友あり。悪しといはゞ辨護もやしたまはむ。否、われとてもその
 直あるこゝろを知り、貌にくらぬを見る目なきにあらぬど、年頃つきあひしゑ、わが胸
 にうづみ火ほどのあたゝまりも出来ど。たゞ厭ふにはゆるは彼方の親切にて、ふた親のゆる
 しゝ交際の表、かひを借さるゝともあれど、唯二人になりたるときは、家も園もゆくたも
 あう鬱陶せく覺はて、こゝろともなく太き息せられても、かしら熱くなるまで忍びがたうを
 りぬ。何ゆゑと問ひたまふな。それを誰か知らむ。戀ふるも戀ふるゆゑに戀ふるとこそ聞け、
 嫌ふもまたさならむ。」

①
②
③
④
⑤
⑥
⑦

①【われとても】我とても【塵】。②【こゝろ】心【塵】。【あらぬど】
 あらぬど【原・美・改・塵・縮】*【底】は誤植。③【うづみ火】うづ
 め火【案】。⑤【鬱陶せく】いぶせく【縮】。【忍びがたう】忍びがた
 う【原・美・塵・縮】*【底・改】は誤植。

〈48〉

「あるとき父の機嫌好きを覗得て、わがくるしさいひ出でむとせしに、氣色を見てなかば言
 ①

はせず、『世に貴族と生れしものは、賤やまがつなどの如くわが儘なる振舞、おもひもよらぬとなり。血の權の贅は人の權なり。われ老たれど、人の情忘れたりなど、ゆゑな思ひそ。』
 ③ 向ひの壁に掛けたるわが母君の像を見よ。心もあの貌のやうに厳しく、われにあだし心おこさせ玉はず、世のたのしみをバ失ひたれど、幾百年の間いやしき血一滴ませしとなき家の譽はすくひぬ。』
 ④ といつも軍人ぶりのこと葉つきあらくしきに似ぬやさしさに、兼ねてといはむかく答へむとおもひし畧、胸にたゝみたるまゝにてはもめぐらさず、唯心のみ弱うなり
 ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ てやみぬ」。

①【言はせず、】言はせず。「美・改・塵・縮」。③【贅】贅「原・美・改・塵・縮」。⑥【すくひぬ】。「すくひぬ。」「縮」。⑦【畧】略「原・塵・縮」。美・改・塵・縮」*「底」は誤植。⑤【失ひたれど】失ひぬれど「塵」。【なりて】なりで「縮」。⑧【やみぬ】。「やみぬ。」「原・縮」。

〈49〉

「固より父に向ひてはかへすこと葉知らぬ母に、わがこゝろ明して何にかせむ、されど貴族の子に生れたりとて、われも人なり。いまくしき門閥、血統、妄信の土くれと看破りては、
 ① 我胸の中に投入るべきところなし。いやしき戀にうき身窶さば、姫ごぜの耻ともならめど、
 ② この習慣の外にいでむとするを誰か支ふべき。「カトリック」教の國には尼になる人ありと
 ③ いへど、こゝ新教のザツクセンにてはそれもはならず。そよや、この羅馬教の寺にひとし
 ④ く、禮知りてなさけ知らぬ宮の内こそわが冢穴なれ」。
 ⑤ ⑥

①【何にかせむ、されど】何にかせむ。されど「原・美・改・塵・縮」。耻ともならめど「原」。④【誰か支ふ】誰支ふ「案」。【べき。】べき
 ②【妄信】迷信「塵」。【看破りては】*「底」のルビ「ややぶ」は誤 や、「原」。⑤【羅馬教】*「原」のルビは「ろまぎやう」。⑥【冢
 植「原」のルビは「みやぶ」。③【耻ともならめど】耻とはあらめど「案」 穴なれ」。【冢穴なれ。】「原・縮」。

〈50〉

「わが家もこの國にて聞はし族あるに、いま勢ある國務大臣フアブリス伯とはかさある好あり、この事おもてより願はざいと易うらむとおもへど、その叶はぬは父君の御心うごかし難きゆゑのみならず。われ性として人とくもに歎き、人とくもに笑ひ、愛憎二つの目にて久しく見らるゝとを嫌へば、かゝる望をかれに傳へ、これにいひ繼がれて、あるは勤められ、あるは諫められむ煩はしさに堪へず。況んやメルハイムなどの如く心淺々しき人に、イ、ダ姫われを嫌ひて避けむとすなど、木のれ一人にのみ係るとのやうにおもひ做されむと口惜しからむ。われよりの願と人に知られで宮づかへする手立もがとおもひ惱む程に、この國をしバしの宿にして、われ等を路傍の岩木などのやうに見もすべきおん身が、心の底にゆるぎなき誠をつゝみたまふと知りて、かねて我身いとほしみたまふフアブリス夫人への消息、ひそかに頼みまつりぬ」。

⑩ ⑨ ⑧ ⑦ ⑥ ⑤ ④ ③ ② ①

〈51〉

①【聞はし】聞ゆる「塵」。。②【あり、】あり。「美・改・塵・縮」。

【叶はぬは】恒はぬは「縮」。。③【目にて】目もて「塵・縮」。。④【繼がれて】*「原」のルビは「づ」。。【あるは勤められ、あるは諫められむ】あるは諫められ、あるは勤められむ「塵」。。⑤【堪へず。】堪へず、みまつりぬ。」「【原・縮】。

①「されどこの一件のとはフアブリス夫人こゝろに秘めて族にだに知らせたまはず、女官の闕員あれバしバしの務にとて呼寄せ、陛下のねん望もだしがたしとて遂にとゞめられぬ」。

②①【知らせたまはず】知らせ玉はず「塵」。。②【とゞめられぬ。】とゞめられぬ。」「【原・縮】。

〈52〉 「うき世の波にたゞよはされて、泳ぐと知らぬメエルハイムがごとき男は、わが身忘れむとてしら髪生やすともあからむ。唯痛ましきはおん身のやどりたまひし夜、わが琴の手とゞめし童なり。わが立ちし後も、よなく縄をわが窓の下に繋ぎて臥しゝが、ある朝羊小屋の扉あかぬにこゝろつきて、人々岸邊にゆきて見しに、波虚しき船を打ちて、残れるはかれ草の上なる一枝の笛のみありしと聞きぬ」。

⑤ ④ ③ ② ①

①【たゞよはされて、泳ぐ】たゞよはされて泳ぐ「美・改・塵」。【泳縮】。⑤【ありしと】ありきと「美・改・塵・縮」。【聞きぬ】。【聞ぐと】泳ぐ術「塵」*「塵」では「術」に「すべ」とルビあり。②【琴】きぬ。「原」聞きつ。「美・改・塵」聞きつ。「縮」。【縮】。【改・塵・縮】。④【こゝろつきて】こゝろづきて「原・美・改・塵・縮】。

〈53〉 かたりをはるとき午夜の時計ほがらかに鳴りて、はや舞踏の大休となり、妃はおほとのごもり玉ふべきをりなれば、イ、夕姫あわたゞしく坐を起ちて、こなたへ差しのばしたる右手の指に、わが唇觸るゝとき、隅の觀兵の間に設けし夕餐にいそぐまらうど、群立ちてこゝを過ぎぬ。姫の姿はその間にまじり、次第に遠ざかりゆきて、をりく人の肩のすきまに見ゆる、けふの晴衣の水いろのみぞ名残なりける。

⑤ ④ ③ ② ①

②【をりなれば】をりなれば「原・塵・縮】③【唇觸るゝ】唇の觸るゝは「夕餐」に「ゆふげ」とルビあり「原」ですべと訂正。【いそぐ】縮】。【設けし】設けたる「塵」。【夕餐】夕餉「塵・縮」。*【案】急ぐ「塵】。⑤【名残】名残り「縮】。

文づかい畢

*「原・美・改・塵・縮」には無し。